

***** 2009.3.25 発行*****

Kwacha (クワチャ) はチェワ語で「夜明け」を意味します。

編集・発行：日本マラウイ協会
〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-2-24 青年海外協力協会気付
Tel. 03-3447-2921 Fax 03-5798-4269
Home Page <http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm>
E-mail japan-malawi@mc.newweb.ne.jp

【マラウイ共和国】

面積：118,484 平方 km (日本の約 1/3)
人口：1360 万人 (2006 年世界銀行)、首都：リロングウェ
独立：1964 年 7 月 6 日、公用語：英語、チェワ語
政体：共和制、大統領：ピング・ワ・ムタリカ
為替レート：US\$1 = MK 144.256 (3 月 9 日現在)
MK 1 = 0.71279 円(3月9日現在)

【日本マラウイ協会 (Malawi Society of Japan)】

日本とマラウイ両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的とする任意団体です。趣旨をご理解の上、広く各位の入会を希望します。会員数:280人(3月1日現在)



マラウイ共和国 国旗



ニュース マラウイ政府から 帰国隊員に感謝状

2008 年 12 月 15 日、来日中のマラウイ国ジョイス・バンダ外務大臣よりマラウイ協力隊派遣第 1 期生に感謝状が授与された。これは昨年 7 月にリロングウェに日本大使館が開設され、初代大使の野呂大使のご尽力と国際協力機構 (JICA) マラウイ事務所のバックアップなどにより実現したものの。

授与式は JICA 地球ひろば 2 階セミナーホールで午後 7 時から開かれ、マラウイ外務省外交団、駐日マラウイ大使をはじめ、野呂大使、日本外務省、JICA、青年海外協力隊事務局 (JOCV)、青年海外協力協会 (JOCA) の関係者と当会からは数原会長以下、マラウイ派遣 OB/OG が 10 数名出席し、総数は 50 名以上となった。

バンダ外務大臣からは「長年にわたり協力隊員が誠心誠意マラウイの発展のために活動していることに心から感謝します」との言葉とともに、第 1 期生代表の森本直樹 OB (昭和 46 年度 1 次隊 水産統計) に感謝状が授与された。森本 OB は「今後も帰国隊員としてマラウイの発展をできる限り応援したい」と返礼した。



◀ レセプションで挨拶する日本マラウイ協会の数原会長

授与式の後、会場を 1 階のカフェフロントに移し、バンダ外務大臣来日歓迎レセプションが開催された。冒頭、当会の数原会長が大臣来日に歓迎の言葉を述べると共に、長年にわたる協力隊員受け入れに対するマラウイ政府の様々な配慮に感謝の意を表した。続いてバンダ外務大臣から歓迎レセプションと日頃の協力隊員の活動に対する感謝の意を表する挨拶があり、金子 JOCA 会長による乾杯の発声で会は始まった。OB/OG らはバンダ外務大臣やマラウイ外交団と言葉を交わし、互いに友好・懇親を深めるレセプションとなった。



◀ バンダ外務大臣 (中央) と感謝状を手にした森本 OB 他

ニュース NHK テレビ番組に 制作協力

日本マラウイ協会は NHK の依頼により同局が取材したマラウイの映像編集・番組制作に協力した。これは、報道局国際部の西川光子記者が昨年マラウイに入国し、主に「気候変動が生む教育格差」について取材、持ち帰ったビデオテープを編集するにあたり、チェワ語の翻訳で協力依頼があったもの。

同局の依頼を受け、当会ではチェワ語に堪能な 2 名の OG を紹介した。1 回目は昨年 10 月 27 日に細谷美果 OG (平成 18 年度 1 次隊 エイス対策) が協力、編集後の映像は 11 月 20 日 23:15 からの BS1 「今日の世界」の中でチェワ語の日本語字幕付きで放送された。内容はマラウイでも気候変動により燃料用の薪が減少し、学齢期の子供の中には薪を拾いに遠くまで行かなければならない人が出てきており、それが学校に行く時間を奪っているというもの。



▲ 左から編集スタッフ 2 人、島崎 OG、西川記者

2 回目は島崎恵 OG (平成 17 年度 3 次隊 家畜飼育) で、本年 1 月 8 日に東京・渋谷の NHK 放送センター編集室で約 5 時間半にわたって翻訳作業に協力した。この時は前回と同様テーマの「気候変動 奪う教育」と題した総合テレビ朝の「おはよう日本」内の「ワールドレポート」用と、日曜夕方方の総合テレビ「海外ネットワーク」内で放送するチキン&チップスの屋台と子供たちの遊ぶ様子、将来の夢を語る映像を見ての翻訳作業であった。「気候変動」に関するテーマはラジオ第 1 放送、テレビ国際放送 World TV でも放送された (詳しい放送日時は 4 面の「最近のマラウイ関係テレビ/ラジオ番組/記事」欄参照)。

レポート マラウイ農民自立 支援プロジェクト近況

本紙第 33 号 (2005 年 3 月 23 日発行) で紹介した青年海外協力協会 (JOCA) 設立 20 周年記念事業～マラウイ農民自立支援プロジェクト～の近況レポートが届いた。第 33 号、第 37 号、第 39 号とあわせてご覧下さい。

文責：JOCA 丹羽克介

対象期間：2005 年 9 月～2009 年 3 月 (3 年 7 ヶ月)
協力相手機関：マラウイ農業食糧保障省
対象地域：ムジンバ県 カズンバ・チカンガワ普及計画地域
対象受益者：小規模農家約 1400 世帯
上位目標：農民の生活レベルが向上する
プロジェクト目標：地域を活性化する個人・グループが育つ
外部評価結果より：20 の農民グループ、農民リーダー 1 名、伝達農家 (予備軍含む) 37 名が育成された。

■ アプローチを振り返る

ムジンバで 4 回目の雨期を迎えました。プロジェクト車両の走行距離は 13 万 km を超え、タイヤは 3 回交換、ちなみに運転手も諸事情により 3 回入れ替り現在 4 代目です。この間に対象地域では「JOCA」の名が浸透し、そのスピリットと共に独り歩きしています。周囲の農民が憧れの目で対象グループを「JOCA」と呼び、伝達農家も JOCA と呼ばれ、その彼らが結成した自分たちのグループを「JOCA」と呼んでいます。対象外の地域で JOCA の看板を見た時は驚きました。では、ここに至るまでの JOCA のアプローチを振り返ってみたいと思います。

3 年半前は、モノを提供しない、指示を与えないという JOCA のアプローチに農民は戸惑い、現地スタッフでさえ疑念を抱いていましたが、現場の状況に合わせてアプローチを柔軟に変えつつも、基本的な姿勢は頑なに貫いてきました。そして、依存性を表す典型例として政府農業普及員と農民との間にあった指示する・される関係を崩すことが自立発展の土台を築く上で不可欠と考え、「Think on our own, Decide on our own and Act on our own」(自ら考え、自ら決断し、自ら行動しよう。)と標語のように村、農民グループで繰り返しました。同時に現地スタッフにも私自身にも主役は農民で、私たちはサポーター/ファシリテーター (気付けせ屋) だと常にその役割を確認し言動と照らし合わせるよう心がけました。一方、農民のレベルにあった研修 (比較栽培) を通じて小さな喜びと気づきを与えることを繰り返し、それらが生計向上に繋がったことで、技術および JOCA に対する信頼を得てきました。

次に、地域内のコミュニケーションを増やすことが地域活性化のカギとなると考えて、技術やノウハウまた情報をシェアする意識を浸透させ普遍化することを試みました。それを積極的に実践する伝達農家が育つアプローチとして、研修の要旨があるグループと教えることに関心を示す農民を

引き合わせるアレンジをしました。これをお見合いと呼び、私たちは仲人として、双方の継続的な関係が築かれることを期待しコミュニケーション機会を提供するわけです。ただ、意識の変化に合わせて段階的に仲介度合いを下げていきました。まず、人に教えることに不安があった農民が、「自分でできるんだ」という小さな気づき」に始まり、次に人に喜んでもらえる喜び、さらに教える喜びを感じ、自信がつき、周囲からの信頼を得てさらに自信がつき、ステイタスや名声を得るようになる。といった具合に研修を重ねるうちに意識の変化が起こり、伝達農家が育ってきた経緯がありました。

■ 外部評価調査実施

こうしたアプローチで展開してきたプロジェクトが、開始から3年を迎えた昨年9月に、5名の調査団員により、農村技術領域、プロジェクト・プロセス、そしてOECD・DAC5項目の3専門領域における外部評価が実施されました。その総括のなかのひとつを抜粋します。

「農民による地域資源の価値の再認識と複合的な利用を活性化させ、農業生産・食生活の多様化といった具体的成果を上げながら、農民の自立と主体性を尊重した「自立のための学校」という特徴をもった効果的かつ効率的なエンパワメントを行っていることが、活動対象の農民自身の語りからも明らかとなった。」



◀カダワンドンダグループのバナナ畑を視察する調査団

この「自立のための学校」の説明として、本文中に対象農家のコメントがあります。「～略～自立した農家は、ほかの農民に学んだことを伝えてゆくことが可能となる。そう、JOCAプロジェクトとは、自立のための学校である。私たちは、農民として自立すること、自然の脅威から自立すること、経済的に自立すること、普及員からも自立して自分たち自身で農業を続けてゆくことが可能となった。」

これを語ったゾンベ村長は「公の目標に向かって人々をリードし刺激を与える存在である」農民リーダーとして評価された人物です。

■ 伝達農家によるミーティング開催

昨年後半あたりからこのゾンベ村長らが発起人となり、伝達農家ら自身によるミーティングが開催されています。きっかけはプロジェクトが終了してしまうことを危惧した彼らが伝達活動を継続すべきだとの考えからのようです。現在、ヤギ初期投資プログラムの次期受益グループ選定や停滞グループ再活性化などについて話し合われています。

私たちは招待される立場ですのでミーティング中は極力言動を控えるのですが、効果的な話し合いになるようにサポートします。ミーティングの流れは適切か、論点はずれがないかなどを観察し、気付けさせるようにしています。私たちからは直接的な影響を与えずに、彼ら自らがこのミーティングを組織したことが非常に大きな意味を持つと考えています。これまで農民と伝達農家を通してグループが活性化し、言い換えると点と線の活動だったのが、このミーティングを起点に共有する情報量が増え、技術伝達が増し、また共同販売など面的な活動の広がりを見ることが大いに期待されます。



▲地域の発展を担う精鋭たち(手前がゾンベ村長)

■ 第2フェーズは？!

前述の外部評価の提言のなかで、農業体系の強化やマーケティング、地域活性化に向けての本格的な取り組みなどの課題を抱えており、プロジェクトを継続して、それらの課題への対応が望まれる。とあり、その他に、プロジェクトのモデル化を図ることも提言されています。是非とも、続けたいですね。

レポート 第5回マラウイウォームハートプロジェクト中間報告

日本マラウイ協会では、マラウイ国内の地域発展と改善のために必要な草の根レベルでの協力活動で、協力隊員の隊員支援経費を活用できないものを支援することを目的に、隊員からの要請に基づいて直接的な資金援助を行っている。

当プロジェクトの第5回目として、平成18年度3次隊 小松原裕子隊員(村落開発普及員)＝共同申請者：平成19年度4次隊 高岡倫也隊員(村落開発普及員)＝から2008年9月5日付で「観光施設建設プロジェクト～お土産店建設および観光用牛車製作」の申請があった。

当会では同年9月26日に合議審査を行い、申請案件を適正と認め数原会長へ決裁を申請した。申請金額は14,8081円。10月8日に数原会長の決裁を得て、10月10日に送金した。以下はプロジェクトの中間報告である。

平成19年度4次隊 高岡 倫也

2008年8月21日、同任地デッサの18年度3次隊小松原裕子隊員より「ンバラシ観光村を復興させないか?」という提案を受けました。このンバラシ観光村というのは村で、デッサタウンから北へ約10kmの位置にある村です。過去に16年度3次隊 観光隊員の松永恵OVがマラウイの伝統ダンス「グレンワール」をショーとしてみられるように開発したものの、松永OVの帰国後にプロジェクトをサポートする者がいなくなった結果、訪れる観光客も減り廃れてしまいました。そこで、我々デッサを任地とする隊員2名がその復興をサポートすべく住人と協力してプロジェクトを開始することになりました。

まず行うべきことは、問題分析。なぜ観光客が減ってしまったのか?問題は主に2つ。1つは観光ビジネスの知識に乏しい住人だけでは観光村のサポートが難しいこと、そしてもう1つは村の位置自体はそんなに不便なところではないが、交通手段に難があることでした。これまでの交通手段は自家用車かタクシーによる移動に限られていたのです。ビジネスに関するサポートとしては、我々2名の隊員がサポートしていくことが可能と思われましたが、交通手段に関しては我々の力の及ぶところではないため、日本マラウイ協会の支援をいただくことになりました。この際、交通手段として我々が考えたのが「ンゴロ」と呼ばれる牛車の製作です。ンゴロは移動時間が自家用車よりかかるものの、観光客がンバラシ観光村に至るまでの景色を堪能することができるため、適当と考えました。

また、観光村に付加価値をつけること、そして住人の現金収入向上を目的として、お土産店の建設も行うことにしました。こちら日本マラウイ協会の支援で建設することになりました。ンゴロの製作は早々に終了したものの、お土産店の建設は苦労の連続でした。もともとは雨期が始まる前の11月中には完成する予定で、住人たちが我々ボランティアもこれは可能だと楽観的な考え方をしていたのですが、建設終了の目処がついたのは2009年2月。この原因は、いろいろありますが雨期への突入が大きかったでしょう。



◀完成したお土産店

お土産店の建設にはレンガと土が必要不可欠でした。これらの材料は村内にある各集落が分担して持ち寄ることになっていたのですが、集落によって

は担当した材料を入手するのに苦勞し、すべての材料の搬入が遅れてしまいました。そうこうしているうちに雨期に入ってしまい、これが結果として大規模な遅れをもたらすことになりました。



◀お土産店完成記念パーティーの1コマ

そのほか、建設業者の夜逃げや内装担当大工の仕事の遅さも完成を大きく遅らせる要因になったのですが、なんとか2月下旬に完成し、2月26日にデッサ県事務所、農業省デッサ県地域開発事務所、JICAマラウイ事務所からのゲストを迎えてのお土産店完成記念パーティーを行うことができました。今後はプロシヤの改訂(2009年4月予定)などを計画しています。

最後にウォームハートプロジェクトを通してンバラシ村を支援していただいている日本マラウイ協会他、関係者の皆様、ご協力誠に感謝しております。今後ともご支援よろしくお願いたします。

レポート マラウイへ届け母心

マラウイ母の会 佐藤 順子

「息子や娘が現地で頑張っているんだもの、日本にいる私たちも何かできないかしらね?」私どもの活動は、3年ほど前、隊員の母同士のごんお喋りから始まりました。やがて思いついたのが、マラウイの布地、チテンジでトートバッグを作ること。恐る恐る日本マラウイ協会に打診したところ、話ほとんど拍子に進み、グローバルフェスタなどのイベントでのチテンジバッグ販売が実現しました。

アフリカ独特のカラフルなプリントが目を惹き、またエコバッグの普及とうまくマッチしたのか、日本の母達の手作りチテンジバッグは売れ行き好評で、思った以上の収益をあげることができました。そしてこの度、その一部を、現地隊員の活動の支援金として送ることができました。それぞれの隊員からの報告書と申請書を元に、ここにご紹介します。

1. LIMBIKANI(頑張り屋)プロジェクト

■平成18年度3次隊 ルンズ 佐橋八衣隊員の活動(母の会から60000クワチャ寄付 2008年4月)

マカタ地区の10の小中学校の女子約500名を対象に、2008年4月～10月に実施。活動内容は、性



▲教材を読む生徒たち

教育とエイズ教育の教材配布、プロジェクトの写真を載せたカレンダーの作成・配布。性教育、エイズに関する講習会を開催し、グループディスカッションやシミュレーションゲームなどを実施。参加した生徒たちからの手紙と、写真を載せた手作りのレポートが母の会に届きました。

2. 就学前児童への食料配布プログラム

■平成18年度1次隊 カボコ 本田地恵隊員の活動(母の会から60700クワチャ寄付 2008年7月)

住民組織が実施する、就学前児童(孤児を含む)の給食事業の支援。遊びや簡単な勉強のあとにお粥を食べさせるプログラムを通じて、栄養の改善と教育のきっかけを作る。支援金で購入した食材(メイス、砂糖、大豆)で作ったお粥を食べる子供達の写真が送られてきました。



◀ お粥を食べる子供達

3. 村落部のエイズ関連支援団体への自転車配布

■平成19年度1次隊 ルウェレジ 田中加奈子隊員の活動 (母の会から18万ウチャ寄付 2009年3月)

支援団体のメンバーが隊員と共に村落を訪問し、エイズ教育、栄養改善、在宅介護などを行うための移動手段として、6つのグループに2台ずつ自転車を購入する。この地域には公共の交通機関が無く、現在は徒歩以外方法が無いので、遠隔地への訪問が



困難であり、情報が届きにくい。活動は開始したところで

◀ 村でのエイズ教育の様子

母の会では今後とも、特に「マラウイの女性と子ども達の健康と幸せな将来を実現するための隊員の活動」を支援したいと考えています。国は違っても、子どもの幸せを思う母心は同じ。隊員の無事を祈りつつ、少しでもマラウイの子ども達の幸せに繋がればと、これからもチテンジバッグを縫い続けていきたいと思います。最後になりましたが、支援金を活用して実りある活動をしてくださる隊員の皆さんをはじめ、視察の旅でチテンジを買ってきてくれたお母さん達、チテンジを寄付してくれたOB隊員の皆さん他、ご協力いただいた多くの方々に、感謝を申し上げます。

母の会連絡先 (代表: 佐藤順子)

E-mail amai_3@yahoo.co.jp

母の会についてのお問い合わせをはじめ、隊員を心配するご家族の方、どうぞご連絡を。「留守家族先輩」としての経験などをお話することができます。チテンジの寄付も大歓迎です。

イベント グローバルフェスタ2008

平成21年度1次隊候補生 小学校教諭 宮澤 尚

2008年10月4・5日(土・日)、東京・日比谷公園にて「グローバルフェスタJAPAN2008」が開催され、マラウイ協会は今回も出展しました。サブタイトルは「世界に響け!地球を守るメッセージ」「ひとりひとりが地球市民」。地球環境がさまざまに変化し、そこに生きる私たち人間の生き方そのものも見直していこうという世の中の流れを感じます。「Think globally, act locally.」という言葉が体現されるかのよう、外務省やJICAだけでなく、非常に多くの協力隊OVの方を中心とする団体やNGO、NPO団体が出展していました。

最寄りの地下鉄日比谷駅から、日比谷公園に近づくにつれ、ドラムの音がだんだんと大きくなりました。ステージでは、アフリカドラムをやっているようです。好天に恵まれて、青々とした芝生がいつそう映え、色とりどりのテントが並びました。マラウイ協会のテントはブルー。最近の活動内容を紹介したパネルや各地の風景写真を展示したり、出版物やマラウイの民芸品の販売を通じて、マラウイの紹介をしました。中でも、カレンダー象の販売はなかなか好評でした。

同じテントでは、マラウイ隊員母の会のお母様方も、チテンジバッグの販売は大好評。新作のバックやクッションカバー、ティッシュケースカバーなどもあり、お客さんが絶えませんでした。収益をマラウイの子どもたちに還元したという現隊員からの報告冊子を見て、嬉しそうに語ってくださるお母様方。



私まで嬉しくなってきました。

◀ 筆者(左端)と駐日マラウイ大使(中央)らと

ステージの裏手には、充実した飲食ブースもあり昼食時は行列ができるほど。マラウイ大使館の方が出展しているという話を聞き、早速行ってみました。炊飯器からは、あたたかいシマ。おかずはトマトと

肉とオクラの料理でした。初めてのマラウイの味。2年間の活動を通して、きっと懐かしい故郷の味となっていくのかなと思いながら味わいました。

9月に初めてマラウイ協会の定例会に参加させていただいてから、たくさんのマラウイ協力隊OVの方と出会い、マラウイのお話を伺い、わからないことには答えていただき、さらにマラウイの魅力を伺ってきました。初めて合格通知を頂いたときに知った「マラウイ」への不安の気持ちが、少しずつ氷解していき、楽しみに変わっていききました。

2年間の活動終了後、また改めてグローバルフェスタに参加したいと思っています。

[JICAマラウイ事務所より]

本年1月はじめ、JICAマラウイ事務所に3人の新しい調整員が赴任された。

- ・ ボランティア調整員 佐竹 靖さん (元パラオ調整員) 大原健治さん (10/2・ガーナ・理数科教師)
- ・ フィールド調整員 安高由香利さん (17/3・ザンビア・エイズ対策)

代表して佐竹さんからご挨拶を頂きました。

赴任した当日は天気やすくなるべく、南アからずっと窓外の景色を楽しむことができました。南アでは明らかに機械による耕作地がゆったりと広がっていましたが、リロングウェ上空からの景色は、耕作地が隙間もないほど続き、しかもそれが人力で耕した農地であること、つまり人が管々と地面のほとんどもとを触っているという事実思い至ると神秘的な気持ちになりました。マラウイの何が多くの皆さんを惹きつけているのか、これからよくマラウイを見てみたいと思います。今後ともボランティア事業へのご支援、よろしく申し上げます。

投稿 剣道大会 in マラウイ

平成19年度2次隊 体育 渡邊 琢磨

2008年8月9日、ドマシ中等学校教員養成大学(ドマシ大学)において剣道大会が開催された。参加者はブランタイアの剣道チーム、ドマシ大学の学生、隊員と様々で内容の濃い大会となった。

当日は、9時に大会開始予定。しかし、アフリカンタイム故に大幅に遅れ10時過ぎの開始となった。プログラムは午前個人戦を2回(初心者部と中上級者部)行い、午後団体戦を2回。個人戦初心者部には廣瀬隊員(ムランジェ)と私、中上級者部には2段持ちの女剣士・後藤隊員(リロングウェ)が参加した。



◀ 大会に参加したメンバーの記念写真

先に行われた中上級者部では、ブランタイアで定期的に稽古を行っているブランタイアチームの精鋭達が迫力ある試合を展開。まだ試合を見たことのないドマシ大学の学生たちは一様に大喜び。面が入っては叫び、体と体がぶつかったら大喜び振り。彼らはこの後に初心者部があるというのに、緊張の面影なく試合観戦を楽しんでいた。日本人の一番手として期待を寄せていた後藤隊員であったが、油断(?)のためかマラウイアンに綺麗に胸を決められ、一回戦敗退となった。次なる初心者部では、大会2ヶ月前から毎週練習を重ねたドマシ大学の学生が主に参加。最初はごちなく竹刀を振り回し、剣道とはとても思えずまるでチャンバラの様だった。しかし、試合を重ねるにつれて選手たちの動きも剣士らしくなり、後半はかなり剣道らしい試合となった。この、初心者部にも隊員が参加したが、2名とも決勝まで行かず敗退した。

休憩の後には、マラウイ人・日本人ミックスの東西対抗団体戦。この試合は初心者・経験者・マラウイ人・日本人関係なくミックスされ、とても面白い試合となった。中でも、印象的な試合は、当日初めて試合に出場したドマシ大学の学生が、経験者であるブランタイアチームの一角を一本勝ちで倒したことである。彼は体育科の学生で運動神経も非常に良く、吸収も早かった。しかし、剣道のような独特の技術を擁するスポーツはやはり経験者が有利である。その中で彼の勝利は驚き以外の何ものでも

なかった。勝ち負けではなく、剣道に楽しく触れることの出来た団体戦であった。

この後のマラウイ vs 日本はミックスとは違う緊張とプレッシャー、個人戦とは異なる雰囲気を出していた。私が思うに多分、マラウイ人の団体メンバーより隊員で構成された日本人チームの方が緊張していたように思う。顔つきも先ほどまでは違い、真剣そのものであった。先鋒の後藤隊員は、午前に行われた個人戦の悔しさをばねに団体戦では気持ちを切り替えたようで、幸先よく一本勝ちを収めた。先勝し勢いに乗る日本チームは廣瀬隊員が中堅を務めた。相手は個人戦(中上級者)の優勝者であった。日本人応援団の気持ちが届き善戦。しかし、惜しくも敗退した。1対1で迎えた決勝戦。日本チームの大將はマラウイ隊員の中では一番強い、4段の安宅隊員(ブランタイア)。相手は個人戦(中上級者)3位の兵。開始約2秒。相手の籠手に一本が入る。あまりの早さに会場はどよめくことすら忘れ静かになった。が、審判はしっかりと一本と示している。文句なしの一本らしいが、実のところ何が起こったかわからなかった。多分籠手を打たれた相手さえも、はっきり分からなかったようなスピードである。2本目も開始2秒ほどで籠手あり。あまりの凄さに2本目も私は確認できなかった。文字通り瞬殺であった。

結果、2対1で日本チームの勝利。最後の大将戦のこともあり日本チームの圧勝。マラウイアンにも、剣道の祖国・日本をアピールできたに違いない。

試合に参加した選手をはじめ、運営に携わった方、初めて剣道を見たと言うマラウイ人も、皆が大会を楽しめ、多くのマラウイアンが剣道に触れる機会を持つことが出来た。今後このような大会を継続的に行っていきたいと思います。また、開催にあたってご協力いただいた関係者の皆様に感謝いたします。

投稿 大学生がみるマラウイ

千葉大学文学部1年 関本康二

初めての海外。初めてのアフリカ。初めてのマラウイ。10年ぶりの飛行機。僕を迎えたのは「何も無い」土地と危なっかしい操縦。比較的小さめの旅客機の座席からマラウイを見下ろすと、平べったかった。これといった建物が見当たらず、思わず日本と比較してしまっ。別世界、これが最初の印象だった。

はじめからマラウイを存分に満喫してやるぞという勢いでいたのですが、空の旅の疲れなのか、標高の高さなのか、日差しの強さなのか、夜になると今まで経験したことのない異常な疲労を感じました。そんな中でもいろいろ体験してきました。

まず、シマを食べました。だけど見た目に似合わず、食べる場所によって味が全然違う、驚きました。結果として、街のレストランで食べるよりも村のおばちゃんに作ってもらったシマの方が断然おいしかったです。

次はミニバスです。ワンボックスカーです。マラウイ人の足なんですけど、これには驚かされる部分が多々あります。どうやら日本から輸入されても大抵の場合、塗装はされないため、街ではよく日本の表記が描かれている車を見ることが出来ます。噂には聞いていましたが、これほど多いとは思いませんでした。そのような車を見るたびに日本を思い出していた気がします。さらにそのワンボックスカーに約20人も入ります。内装のあらゆるところが改造されていて(安全性が損なわれている)座席も取り替えられていて、それが可能になっています。かといってスペースがあるわけではなく、ぎゅうぎゅうに詰めてやっと20人です。僕もその中にいましたが、かなり窮屈でした。この状態で車を猛スピードで走らせるので、はじめは理解の範囲を超えていました。

途中で慣れちゃいましたけど。

最後にひしひしと感じたこと、人がいいということとマラウイには他に頼る傾向があるということ。とにかく、道を歩けば、「How are you?」という言葉がよく投げかけられます。人懐っこいという表現がよりの確かもしれません。それでどこに行くんだと聞かれて答えると、こちらが場所を知らないわけではないのにわざわざ道順を教えてくださいます。1つ、かっこいいエピソードがあります。僕が誤って行き先の異なるミニバスに乗って出発するのを待っていたとき、声をかけてきたマラウイ人が、その誤りを指摘してくれた上に、目的地行きのバス(普通のバス)がもう出発してしまっておきりめたにも関わらず、彼が走って止めてくれ、最後に「Have a nice journey!」と言って去っていきました。これにはさすがに感動しました。かっこいい、この人、と思いました。

しかし、その一方で外国人に頼ろうとする傾向があるのは非常に感じました。何かと売りつけてきます。しかも今日は何も食べてないんだと言って迫

てくることもありました。自意識が低くなるから買ってはいけないと思って、はじめは要らなくても買ってました。でも、これも後半からはなるべくそうしないように心がけることができました。

3週間の様々な経験をして、ここでは語りつくせません。それでも多くの学びを得たのは確かです。そして、マラウイでのこの体験を周囲の人たちに伝える努力もしています。現地では、はじめから最後までお世話になった方々に大変ご迷惑をおかけしてしまいました。本当にみなさんに感謝しなければなりません。また赴く際は万全の準備をし、周りに迷惑をかけるないように旅をし、今回はまた違ったことを学べればと思います。



◀ 筆者と子供達

最近のマラウイ関係テレビ/ラジオ番組/記事

- (1) 2008.11.20
NHK BS1 23:15~23:40の一部(約14分)
今日の世界「気候変動が生む教育格差」
- (2) 2008.11.26
日本テレビ 19:00~19:58の一部(約17分)
笑ってコラえて!「ダーツの旅 全世界版 スペシャル マラウイ共和国」
- (3) 2008.12.4
NHKラジオ第1 07:33~07:38(約5分)
ラジオあさいちばん ワールドリポート
「気候変動が生む教育格差」
- (4) 2008.12.9
フジテレビ 08:00~09:55の一部(約15分)
とくダネ! 特捜エクスプレス
「MISIA マラウイ訪問 アフリカ支援にかける思い」
- (5) 2009.1.19
NHK総合 06:20~06:23/08:05~08:08(各3分30秒)
NHKニュース おはよう日本 ワールドリポート
「マラウイ 気候変動 奪う教育」
- (6) 2009.2.1
NHK総合 18:15~18:16(55秒)
NHK海外ネットワーク「チキン&チップスの屋台」

- (7) 2009.2.2
NHK World TV 12:00~の一部(3分45秒)
NEWSLINE/ Report from Malawi, Forsaken Future
- (8) 2009.2.11/12
読売新聞朝刊 あすへ走る マラウイ報告(上)(下)
- (9) 2009.2.12/13/14
毎日新聞夕刊 エイズと向き合う マラウイ報告(上)(中)(下)
- (10) 2009.2.15
NHK総合 18:43~18:45(約2分) NHK海外ネットワーク「マラウイの子供たち」
- (11) 2009.2.27
毎日新聞朝刊 スマイル@マラウイ
- (12) 2009.3.3
NHK教育 22:50~23:00(再放送あり)(10分)
視点・論点「アフリカ・マラウイ報告① 学校給食視察報告」
- (13) 2009.3.4
NHK教育 22:50~23:00(再放送あり)(10分)
視点・論点「アフリカ・マラウイ報告② 人口問題 性と生殖に関する健康の重要性についての啓発活動」

日本マラウイ協会 2008年9月~2009年2月主な活動内容

- (1) 2008.9.26 9月定例会、機関紙KWACHA第40号記念号発行
- (2) 2008.10.4~5 グローバルフェスタ2008 出席(3面記事参照)
- (3) 2008.10.27 NHK番組に制作協力(1面記事参照)
- (4) 2008.10.29 10月定例会
- (5) 2008.11.25 11月定例会
- (6) 2008.12.15 マラウイ外務大臣感謝状授与式・歓迎レセプション(1面記事参照)
- (7) 2008.12.17 12月定例会 納会、JICAマラウイ事務所新調整員壮行会
- (8) 2009.1.8 NHK番組に制作協力(1面記事参照)
- (9) 2009.1.28 1月定例会
- (10) 2009.2.25 2月定例会

日本マラウイ協会情報

■ 第27回通常総会のご案内

日本マラウイ協会は第27回通常総会を別紙の通り開催します。会員の皆様は同封の葉書にて出欠をご連絡下さい。

■ KWACHAバックナンバー

当会は昨年2月26日に設立25周年を迎えましたが、設立時の機関紙KWACHA第1号から第41号(今号)までの全バックナンバーをPDFファイル化し、当会ホームページへ掲載しています。是非ご覧下さい。

URL: <http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm>から「日本語」を選択、左端のメニューから「機関紙KWACHA」をクリックすると、右ページに号数一覧が出てきますので、希望の号数をクリックしてください。

■ 日本マラウイ協会の刊行物

- (1) チェフ語辞典 統合改訂版(2000年7月発行)
B5版186ページ 1部1,500円(送料290円)
- (2) マラウイ旅行ガイド 新訂第2版(97年7月発行)
「アフリカの暖かき心、湖とサバンナの大地」 B5版108ページ 1部1,200円(送料210円)
- (3) 国情紹介誌「Malawi - The Warm Heart of Africa」第2版(94年7月発行)
A4版40ページ 1部1,000円(送料210円)

送料は「ゆうメール(旧冊子小包郵便物)」扱いで表示しています。複数種を1冊づつご注文の場合は次のとおりです。

(1)+(2) = 340円	(1)+(3) = 340円
(2)+(3) = 290円	(1)+(2)+(3) = 340円

各書ご希望の方は、本ページ最後の入会方法の欄に記載の銀行口座宛に、代金および送料をお送りください。

●「ゆうちょ銀行・振替口座宛」払込取扱票を使って払込む場合(通常払込み)は、必ず、払込取扱票の通信欄に注文内容(希望する「刊行物名」、「部数」、「申込者の電話番号」、「発送先:振込人の住所、氏名と異なる場合)を明記してください。なお、払込通知が当会に届くまでに日数がかかりますので、送金と同時にメールまたはFAXで注文内容をご連絡いただくと、より速く発送することが可能です。

●「ゆうちょ銀行・振替口座宛へ電信振替または電信払込で送金される場合」、および「三菱東京UFJ銀行宛へ送金される場合」は、事前に必ず注文内容(希望する「刊行物名」、「部数」、「発送先」、「申込者の氏名、電話番号)をメールまたはFAXでご連絡ください。

■ ご意見、ご質問をどうぞ

日本マラウイ協会に対するご意見、ご要望、ご質問などありましたら、下記当協会宛へご遠慮なくお寄せください。また、電子メールによるマラウイ関連情報の配信も行っておりますので、電子メールアドレスをお持ちで、ご希望の方は、あわせてご連絡ください。

■ 日本マラウイ協会 月次定例会

日本マラウイ協会では、原則毎月第3水曜日18:30~に、東京都内(通常はJICA広尾:地球ひろば会議室)で、月次定例会を開催し、マラウイ関連の支援活動などについての討議や、マラウイ関係者間の情報交換などを行っております。参加は会員でなくても構いません。初めての方も大歓迎です。詳しくは当協会までお問い合わせください。

■ 日本マラウイ協会 入会方法

ご連絡いただければ入会申込書をお送りしますので、各項記入の上ご返送ください。E-Mailで入会希望の旨を連絡くださっても構いません。また、入金と年会費の合計(個人正会員の場合1,000円+3,000円=4,000円)を下記のいずれかの銀行口座へお送りください。

〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-2-24
青年海外協力協会気付 日本マラウイ協会
TEL: 03-3447-2921 FAX: 03-5798-4269
E-mail: japan-malawi@mc.newweb.ne.jp

三菱東京UFJ銀行 東恵比寿支店 普通口座255739
口座名義人 日本マラウイ協会事務局 貝塚光宗
ゆうちょ銀行振替口座 00190-7-13125
加入者名 日本マラウイ協会

平成21年9月30日までは「ゆうちょ銀行ATM経由の、ご自分のゆうちょ銀行口座から当会のゆうちょ銀行・振替口座宛への電信振替」が手数料無料です。また、平成21年10月以降は「ゆうちょ銀行ATM経由の、払込取扱票での当会のゆうちょ銀行・振替口座宛への払込み」が安くて便利です。